

文献紹介

土田良一 著：

『近世宿駅の歴史地理学的研究』

吉川弘文館 1994年5月

A5判 487ページ 7,725円

昭和戦前期から昭和30年代頃までは、近世交通関係の研究は、歴史地理学の諸分野の中でも最もさかんな分野だったと思う。佐々木清治・浅香幸雄・喜多村俊夫・磯崎 優・松村安一・原沢文弥・長井政太郎・大井 武等諸先学の多数のすぐれた論考が、当時の地理関係諸雑誌を飾っていた。どういうわけか、後に続く世代の研究者にこの分野を専攻する人が乏しい状況が続き、昭和50年にスタートした交通史研究会には地理学者も参加しているが、成果をあげているのは古代道の研究と鉄道を中心とする近代交通の分野で、近世については富岡儀八氏の塩道の研究を除けば寥々たるものであった。史学の側から丹治健蔵・川名 登・丸山雍成・渡辺和敏諸氏等の大著が相次いで刊行されている。往年の盛況を知るだけに残念でならなかった。

近年になって新進の歴史地理学研究者によるすぐれた2冊の著作をもつことができたことは、御同慶にたえないところである。小野寺 淳氏の『近世河川絵図の研究』(1991年、古今書院)と本書である。この両書は、水運と街道交通という点以外でも、きわめて対照的である。前者は書名の通り河川絵図の研究で、主として水運業者の要望により作られた絵図のことゆえ、従来の諸研究とは違った側面から河川水運の研究に大きく貢献した労作といえる。言うまでもなく、きわめて歴史地理学的で、地理学者ならではの研究といえる。

一方、本書の方は書名に歴史地理学的研究と銘打たれているが、歴史地理学的な色彩は比較的稀薄で、交通史そのものの研究の面が強いというのが率直な印象である。これは紹介者の不勉強や偏見によるだけではないらしい。本年の交通史研究会の大会で共同討議の座長をされた丸山雍成氏が著者を紹介される際、「歴史地理学の立場から」と言いかけて、「でも余り歴史地理学的でないが」と付加されていたのが印象的であった。丸山氏は交通史専攻で九州大学教授、九大で学位を得た著者の研究を最もよく知っている方である。

487ページの大著で第1部宿駅の成立基盤(3章)・第2部宿駅存在形態と伝馬役(4章と補論)・第3部助郷の編成過程と地域的展開(4章と補論)、それに、はじめに・あとがき・索引が加わる。第1部では地子免除の問題(第1章)、御定人馬数の変化(第2章)、村・町・宿の尾称の問題(第3章)が論じられ、第2部の第1章で伝馬役負担方法を類型化して変容系列を論じ、特に甲州道中の金沢・葛木・台ヶ原宿の場合について議論している(補論)。第2章ではこの問題を城下町との関連で論じ、第3章で上諏訪、第4章では甲府を事例に議論している。第3部では助郷の問題が扱われ、第2章で東海道、第3章で中山道、第4章で甲州道中について論じる。助郷圏については既に喜多村俊夫氏・佐々木清治氏の研究があるが、先行研究は近世の前期・後期の区別なく扱われているとして、各時代の助郷の編成過程を論じつつ、助郷圏の再検討を行っている。さきに本書は歴史地理学的色彩が稀薄だと書いてしまったが、第3部については歴史地理学的色彩の濃い研究と言えよう。ページ数で50.3%の第3部が図の数では78.3%の47を数え、そのうち19が助郷村の分布図になっている。第3部の第1章で人馬継立の数を検討していることも、先行研究で論じられていないだけに注目される。

著者は新潟県出身で東京で学生生活を送り、しばらく東京で教職に従事してから現職(鹿児島短大)に転じた。本書の対象になったのは五街道であって、とくに甲州道中の研究に力を注いだ。在京当時とはかく、鹿児島から甲信地方に調査に出向かれるのは地の利を得ないことおびただしい。氏が、鹿児島に移られた後もテーマやフィールドをかえることなく当初の研究方針を貫かれたことは、敬服にたえない。五街道についての氏の研究は、本書により一応のまとめがついたことと思われる。今後は、五街道の場合と比較しつつ、鹿児島県を中心とするローカルな交通について研究を進められるよう願ってやまない。

歴史地理学的色彩が濃くても薄くても本書が近世交通の研究を前進させるのに大きな貢献をされたことは間違いない。この分野の研究をされる方の精進をすすめたい。(中島 義一)